信頼できる伴走者と共にこの地で営農を続ける

――福岡県 JAふくおか八女

全国各地で担い手の高齢化と後継者の不在、労働力不足が大きな課題となっている。これからのJAには新規就農者を育て、1日も早く経営を安定させるサポート体制が重要だ。どんなことでも気軽に相談できる関係を築き、担い手の多様なニーズを的確に把握するTAC（地域農業の担い手に出向く担当者）が、地域農業を発展させるキーマンとして活躍していた。

下曽山弓子＝写真　*photo by Yumiko Shimosoyama*　JA全農TAC推進課＝企画協力

就農支援センターの第6・7期生が集合。TAC管理者で農業振興課の荒巻充課長（後列右）とTACの光延さん（後列左）と共に

新規就農者が一人前の農家に成長するために、なにが必要か。農業技術はもちろんだが、地域になじみ、安心して営農し、暮らせる環境が不可欠だ。

ＪＡふくおか八女が、次世代の地域農業の担い手を育てるため、就農支援センターを開所したのは二〇一五年のこと。二一年六月、第七期生五人を迎えた。外部講師を積極的に招き、一年間で、農業技術や経営、政策、流通まで幅広く学べるカリキュラムとなっている。

この日は、二一年五月に第六期生として修了し、就農した五人が集まった。経営は全員がイチゴだ。川島潤矢さん（34）は、今でもよくセンターを訪れる。

「悩んだらここに来て、話を聞いてもらいます。ふらっと来やすいのがいいですね」

背景には、就農後も地域に根ざした経営を続けられるよう支援する同ＪＡの体制がある。そのカギを握るのがＴＡＣだ。

今年四月、ＴＡＣとして着任した営農指導部農業振興課の光延浩喜さんは、自らの役割を〝なんでも屋〟だと自負する。

「相談されるのを待っていてはだめですね。なにげないひと言を聞き逃さず課題を見つけ、ＪＡの担当部署や行政、ベテランの生産者などにつなぎます。なるべく近道を案内したい」

この言葉に、夫婦で研修を受け、就農した天ヶ瀬章さん（39）と聖子さん（37）がうなずく。

「最初は、『なにがわからないのか』がわからなくて（苦笑）。ＴＡＣが先手を打って橋渡しをしてくれるので、安心できます」

ＴＡＣが周囲との架け橋

センターでは、毎月カリキュラム会議が開かれる。新規就農者の声を集めたＴＡＣの提案で、授業の一環として「先輩農家の声を聴く会」が実現した。先輩はセンターの修了生だ。就農して数年たった彼らがさらに飛躍するために、これまでの経営を振り返る機会を設けることも狙いだったという。

研修中に、地域の遊休ハウス所有者とのマッチングや住宅探し、苗作りなど、あらゆる就農準備を進める。就農一年めにして地域の平均以上の農業収入を上げる修了生もいる。

センター長の井上清司さんは、「本来なら、たった一年の研修でそのレベルに達することは容易ではありません。ＴＡＣがいるから、必要なときにすぐに周囲の力を借り、早いペースで力をつけることができています」と話す。

五人にはそれぞれ目標がある。「リピーターがつき、名前で買ってもらえる農家になりたい」と言う内田宗宏さん（34）。埼玉県出身で、大学卒業後の進路としてこの地での就農を選んだ川田悠斗さん（23）は、「農業で食べながら、趣味も楽しみたい」と言う。川島さんは「地域の農家と農事組合法人をつくり、米・麦・大豆を生産したい」、天ヶ瀬さん夫妻は料理人の経験を生かし、「加工に挑戦したい」と語ってくれた。

営農指導部の辻満晴部長は、こう締めくくる。

「これからの新規就農者が望む営農のかたちはさまざまです。ニーズを的確にくみ取り、定着を図るため、ＴＡＣの活動は重要性を増すはずです」

覚悟ある新規就農者を長く手厚くサポート

就農支援センターの研修生の資格として、「研修修了後、JAふくおか八女管内において居住し、管内で農業経営を行う者」「農業経営開始にあたり200万円程度準備できる者」との厳しい要件を設ける。営農を続ける熱意ある人を集めるとともに、人数をある程度限定し、TACと連携して就農後も手厚く支援するためだ。研修生の選考段階では、面接とは別にセンター長が何度も応募者と話し、納得した状態で研修生になってもらう。

TACだから聴ける声がある

イラストはJA全農TAC推進課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

TACの光延さん（右）と第6期生の川田さん。センターの一画では、研修生の管理するイチゴ苗が立派に育つ

JAふくおか八女

福岡県南部に位置し、八女市、筑後市、広川町が管内。中山間地から広大な筑後平野を有し、米、麦、ミカン・ブドウなどの果樹、JA販売高のトップに位置するイチゴ・ナス・トマトなどの野菜、電照菊・ガーベラなどの花卉、茶の生産が盛ん。TACは現在、管理者1人（兼任）、担当者2人（専任）の体制。

TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで（https://www.zennoh.or.jp/tac/）

TAC管理者の荒巻課長（左）は、「TACだけではさまざまな課題を解決できないからこそ、部門間の連携を促し、JAの総合力を発揮できる」と話す。右は営農指導部の辻部長

多様な担い手にアプローチし、JAへの結集を高める

TACの訪問先は、新規就農者のほか、農業生産法人、集落営農組織、認定農業者など。さらに2016～18年度は、担当者を1人増員し、部会未加入者への訪問に注力。意見・要望のていねいな聞き取りと情報提供で信頼関係を築き、JAの事業利用が促進された。毎月、関連部署との会議で、担い手から吸い上げた課題の解決策について協議。規模拡大を図る組合員に支援金を交付する「チャレンジ250支援事業」など、TACの提案により支援策を打ち出した。

［じっくり話し合おう］JA青年組織とTACが連携し、新規就農者をサポートするためにできる活動を発表し合おう